

## 風土適合型住宅内の環境と住まい方の実態

○佐藤了子（聖霊女短大）

逸見洋子 小林綏枝 田口秀子（秋田大）

目的：風土適合型住宅は、気密性や断熱性に富む快適空間を提供する住宅として普及しているが、生活上での制約もあり、その住まい方にも問題が見られる。本研究では、これらの住居内環境衛生状況に着目し、風土適合型住宅の住まい方において注意しなければならない点について調査したので、その事例について報告する。

方法：調査対象・秋田県内の戸建て住宅及びアパートと対照群としてケアハウスの計35ケース（在来工法住宅を含む）。調査内容・①住居内環境計測項目＝a)住居内の温・湿度測定 b)エアサンプラーによる室内空気の微生物観察 ②聞き取り項目＝家族状態、清掃、空調システム運転状況、喫煙、調理、風呂の始末、観葉植物やベットの有無などの住まい方、及び立地条件等。調査時期・1998年7月～1999年3月

結果：各戸の衛生環境にはかなりの差が見られた。この差異は①主として住まい方、とりわけ日常の清掃状況や洗濯物の住居内乾燥、窓の開閉頻度、ベットや観葉植物の有無等によって生じている。また住居内温度の低い住宅では微生物の発生が少ない。②立地や方位、間取りや窓の位置、暖房器具の種類等の及ぼす影響も見られ、低湿地や池、川のそば、西日を強く受ける方位の家ではその衛生環境の悪化は顕著である。③外的条件と家族形態が等しいケアハウス内居室にも、住まい方による差が目られ、観葉植物の有無、住まい方による結露発生の差がみられた。以上のことから冬季の高温保持や気密性が尊ばれる今日の寒冷地住宅においては、日常の窓開けや、水拭きなど、日常の清掃方法や管理等の基本的な住まい方が室内衛生環境差異に大きく関わっていることが明らかとなった。